
B o o k M a n

シエスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BookMan

【NZコード】

N4451D

【作者名】

シエスター

【あらすじ】

1年半目の7月7日に発生した魔災害『星降る夜』によつて世界の規律は大きく変化してしまった。人類に襲い掛かる「怪人」と古から魔法を用いて人類を守ってきた「ブックマン」との聖戦は世界中を巻き込んだ大規模なものへとなつていた。普通の学生生活を求めて高校生になつた天野シンゴはそんな世界の中で戦に巻き込まれていくのだった。

プロローグ

朝の生放送番組というのは凄まじいものだ。その少年は真新しい制服には似合わないような強烈な目つきで画面を睨み付けていた。

最近になって買い換えた液晶テレビの画面には煙にまぎれた人影が映されている。

日本人らしくないマント姿が何よりも目を引き、そして左腕には分厚い六法全書のような本が開かれていた。

現場中継らしくヘリコプターのプロペラ音が全てをかき消している中でテレビ局クルーのカメラはしっかりとその人物を捉え続けている。

人の多い繁華街に朝早くから出動とは大変な職業だ。少年はそう思いながら味噌汁をする。

マントの人物は左腕に持った本を右腕でなぞっていた。それと同時に本は輝きを増していく。レポーターが「すごい、すごい」と無知な絶叫を繰り返していて不快だった。知らない人間にはこういう感想しか出ないのである。

次の瞬間に本は槍となっていた。燃え盛る炎を発する鋭い槍である。

マントの人物は煙の中に飛び込んだ。それと同時に煙の中で閃光が輝く。

決着がついたのだろう。少年は食器を流しに持つていくと適当に水で流してからテーブルに戻る。

すでに画面は現場中継からスタジオに戻っていた。

「新宿激震！ ブックマン早朝出撃！ か…」

そのテレビ的な見出し文句には大した衝撃もない様子で少年は力バンを持った。電車までの時間合わせにもうしばらくテレビは見れるようでソファーの横に立つたままでじっと画面を見つめていた。

『えーっと現場は新宿区の繁華街でして現在のところ怪人はブックマンによって浄化されたそうです。怪人出現に伴う公共交通機関の遅れ、影響などは現在のところ入ってきておりません』

メインキャラスターが画面を凝視している。少年は指折り数えていた。

「今月はもう5件目か…多いな」

『今月に入つて怪人による被害、ブックマンの出撃は東京都だけでも5件。世界中では20件にも及びますね』

そろそろ時間である。少年はコントローラーを手にした。

『怪人は1年半前までは私達の目に触れることもなかつた脅威です。あの7月7日の事件から我々は新たなる脅威にさらされることになつてしましました。それに対処するのがブックマンなわけですね』キヤスターがボードを出した。この番組はこう言つた小道具に凝り性なので面白い。

『1年半前までは秘密裏にこう言つた怪人を処理してきたブックマンですが、あの7月7日から激増した怪人の存在は公にされたわけです。今まででは秘密裏であつた世界魔法機関も公開され、我が国でも魔法庁が新たに設けられてきました。万全の体制ではありますがやはりブックマンの総数が少ないようですからねえ』

「…まあ、そうだろうな」

『このような状況ではブックマン・アカデミーの生徒さんも実戦に駆り出されているそうです。いやはや若いのに大変です。それでは昨今の怪人による事件の発生について専門家の方のお話をお聞きしたいと思います。現役のブックマン、失礼、ブックマスターでもあります花柳…』

カメラがある人物を映し出した瞬間に少年はテレビの電源を切つた。出発まではまだ時間があるのだが、少年は不機嫌そうにコントローラーをソファーに投げ捨てるときらへと向かつた。

「…嫌な一日になりそうだな」

第1話 炎の少女

人間と言つものは非現実的なものを好む生き物である。そして平穏とか平凡と言つものを軽視する傾向がある。

そんなものは天野シンゴにとつて非常に不愉快な説であった。平穏とか平凡の何がいけないのだろうか。

そう言つものを忌み嫌つて非現実に対して神々しいまでの期待を持ち合わせている人は、よほど現実の生活が荒んでいるのだろう。実際に自分自身が非現実的な世界で過ごしてみるが良い、どれほど現実的な平穏さや平凡こそが神に与えられた祝福的なものであるかを悟ることができる。

天野シンゴは非現実的なものを嫌い、平穏とか平凡と言つものを愛していた。そして希求していた。

それも彼の人生の半分以上は非現実的なものであったから。数ヶ月の勉強生活を終えて、今こうして普通の平凡な公立高校に入学することができたこと。

入学式には満開だつた校庭の桜が徐々に風に流れ、散り始めている様子を休み時間に頬杖しながら眺めるという平凡な学生生活。これの何と素晴らしいことか。それを理解できる者は天野シンゴ以外にはいるはずもない。

傍目には仏頂面で不機嫌そうな表情を浮かべているが内心では満足至極なのである。身長も高い上に性格的にも社交的とは言えず、おまけに誰かに似て目つきの悪いおかげで誤解されることが多いのだが、それでも彼はこの生活に満足しているのだ。

天野シンゴを取り巻く現状が、どれほどまでに彼が切実に望んできたものか、彼以外には語れるはずもないだろう。

南校舎4階にある1年E組の教室からは校庭の隅から隅までが見え、今の時期には徐々に散つていく姿は真に風流でいて美しい。シンゴはボーッとしながら風に舞う桜を見ていた。心の平穏を絵

に書いたようだ。

一つ問題はと言えば、以前までは静かだった教室内が入学当初の人見知りな態度が一変して周囲の座席の者を中心に積極的な会話を試みて騒がしいと言うところである。新学期早々に積極的な接觸を行っていないのはこのシンゴくらいのものだろう。

自分で志願して普通の高校に進んだまではいいのだが、どうにもシンゴは他人と一緒に盛り上がり上がったりするのが苦手でならないのだ。せっかく高校に入学したとしてもつるんでいるのは進学塾時代からの旧友ばかりという始末。

おまけに目つきが悪いものだからクラスの中では早くも浮き始めている。それでいてもシンゴには高校生活を満喫できる要素はあった。

「天野君、何しているの？」

隣の席の住人、小林ルナが天使の微笑みを浮かべながらシンゴを見下ろす形で立っていた。

遠い異国の血を四分の一受け継いだ美しい顔立ちに加え、高校の中でも上位に食い込む愛らしさ瞳、おまけに性格も良いとの噂を持つ女子だ。どんな男子でも夢見るような美少女が親しげに声をかけてくれるのは願つてもいいことである。

「桜、綺麗だね」

「そうだな」

ルナはシンゴの机の上に腰掛けて同じ方向を見ていた。目つきも良くないし、無愛想なシンゴと積極的な交流を持つ女子はこの学校内でも小林ルナくらいのものである。そしてシンゴ自身も入学式から3週間が経とうとしている中、顔と名前の一致する女子が小林ルナくらいだという状態では彼女と会話をするしかクラス内で間が持たないのである。

年頃の少年が女子とも交流をもたないといつのは何とももつたない話なのだ。

しかしシンゴはあまり女子と積極的に交流を持つことに良い気はない

しない。これも誰かの影響を受けたせいだろう。

「天野君は部活どうするの？」

「決めてない、たぶん入らないだろうな。小林は？」

「うーん。まだ決まってない。ねえ、一緒にどこか入りうつよ」

「べ、別にいいが…。適当に決めてくれ」

思わず声色が高くなつたシンゴにルナはクオーターの美しい笑みを見せてくれた。いつ見てもこの笑顔は素晴らしい。

「わかつた。じゃ、メールするからね」

ルナはそう言って机から降りる。メールアドレスと電話番号は最初に会話をした入学式で既に交換していた。

どうして教えあつたのかは覚えていない。それでも平静を取り繕いながらも恐ろしい表情をしていたことは容易に想像できる。

「ちょっと隣のクラスにいってくるよ」

歩みを進めていくルナを黙つて見送るとシンゴの周りはまた静かになつた。

小さなため息、そしてシンゴは再び頬杖をついて校庭を眺め始める。

「…いい御身分だぜ」

面倒そうな声には反応しない方が良い。シンゴの二つ後ろの席では進学塾からの友人である山崎ハジメがふくれている。

どういうわけかは言わなくてもいいだろう。とりあえずは小林ルナのような美少女と悪人面のシンゴが仲良しになっているのが気に食わないのだ。年頃の男子は総じてそんなものである。

「…黙れ、ハジメ」

一瞥されたハジメがゾッとしたように視線を外して俯いた。

照れ臭さを隠すつもりで言ったのだが十二分の威嚇になつた様である。それでもシンゴは満足気だった。

これこそが夢に見た普通の高校生活なのだ。

「どうして小林ルナは天野シンゴと交流を持つのか？」

山崎ハジメと芳川タダシ、進学塾時代からの悪友2人は地球温暖化でも議論しているような表情だ。当のシンゴは、

「知るか」

と面倒くさそうに答えるだけ。ただし言葉とは裏腹に顔は半笑いを浮かべている。

これが2人は気に食わないのだろう。面白くないと言わんばかりに手足を投げ出して屋上に寝転がる。もやもやした恋愛話には似合わない快晴の下、年頃の男子達は昼食を取りながら戦略会議ようじく世間話に花を咲かせていた。

しかしながら入学当初から何故かシンゴと積極的な交流を持つ校内屈指の美少女、戦略会議と銘打つには不適切なほどに感情的な論議しかなされるはずもない。

どうして小林ルナは天野シンゴと交流を持つのか、そんなものは思春期の男子にとって都合の良い解釈しかできるはずもないだろう。それ故に周囲の男子からすれば歯痒いまでの嫉妬心を駆り立てられるだけなのだ。

「何が小林ルナを魅了させたのか？」

旧友2人の問いかけにシンゴが殺氣立つた視線を送る。飛び上がつた2人は静かに調理パンの袋を開け始めた。

ハジメを含めた2人にシンゴが頭として加えられている。クラス内でのグループ分化が進んだ結果に生まれた彼らは中流階級だ。イケメンはイケメンで集い、オタクはオタクで揃い、どこにも入れない中途半端なグループがここだった。

焼きそばパンを食いちぎるシンゴの姿はまさにボスだ。

かつては上級生が集っていた屋上もシンゴの登場で無血占領されることとなつたことは記憶に新しい。

「まあ、良い子だと思う。いや、凄く良い子だと思つた」

シンゴが腕組みして咳くと違つた意味で狙つてゐるようと思えて

しまう。

普通に考えているのだろうがシンゴは眉間に皺をよせるとへたなヤクザよりも風格があるのだ。

「…で、どうするの？」

「…まあ」

シンゴが偏屈にそう答えるとハジメとタダシの2人は頭を抱える素振りで悶絶していた。

「うらやましいんだよ、この野郎！」

「高校入学いきなり、席が隣だからって仲良くなりやがってよ。二人で弁当も食つたり。何様だよ、お前！」

子供のように騒ぎ出す姿に呆気に取られたシンゴだった。しかし2人は本気で悔しがっている様子である。

「まあ、そう言うな」

シンゴが言うとハジメが絶叫してつかみかかってくる。

「つるせえ！」

3

ハジメ達に昼休みに離し立てられたせいか、その日の午後はルナを意識してしまった。

いつもの下校中の何氣ない会話の一つ一つにどうにも神経を使つてしまふ。今さらだが高校一年生で男女が一人きりで帰つてるのがシンゴとルナの一組だけという事実には衝撃する。これは騒がれて当然かもしれない。

おまけに小林ルナは本当に美人だ。入学当初に上級生に声をかけられていたのはシンゴも知つていて、一緒に登上校する下駄箱の中に手紙が入つていることも何度も見かけた。それらを軽く受け流していく小林ルナがこうして毎日シンゴと一緒に登上校なのだ。

「…幸せ者だな、俺は」

小さく呟いたつもりだったが、いつの間にか小林ルナの瞳がじつ

シンゴを見つめていた。

「え、あ、どうした？」

「別に何でもない。何か天野君ずっと一〇一〇してるから何考えてるのかなあ……なんてね」

軽く微笑む小林ルナの姿はまさに天使のように見える。

いつして普通の高校に進学して、いつして綺麗な女子と一緒に登

「まあ、最近は……」

氣の利いた台詞の一つも言えない自分自身が呪わしいところだ。いつもルナから話しうり、ルナから話題が振られる。

いつものように駅前の信号で立ち止まる。同じ学校の生徒が多く立ち止まっているのだがちょうど横断歩道の向こう側に一人の少女がいた。この周辺では見かけない制服、それはむしろコスプレでもしているかのような日本の学生服とは少しデザインを異にしたものだった。

今どきの高校生が短いマントのようなものを制服につけているだろ
うか、そうであつても不思議なことに少女は違和感なくその制服を身に着けている。どことなく風格が漂つているのだ。あの普通ではない制服を身に着けていても有無を言わせないような何かが。

「…見ない制服だね」

小林ルナがそつと咳く。シン「トは頷くと少女を細見した。すると
その少女もシン「トから田を離そつとしない。

珍しい」とだつた。普通はシンゴと田が合うと視線を外して道を
どいてしまうものだ。しかし少女は違う。強い意思を持った視線を
シンゴに向けたままで外そようとしない。

「じつかで見た覚えがあるな」
その小さな言葉に小林ルナも反応した。シンペと少女と見比べて
から少女の方をじつと見つめる。

それは少し睨みつけているようでもあつた。

「あの子の制服、魔法書学院のだよ」

小林ルナがシンゴの袖を引いた。やつ言われてシンゴもよつやく
合点がいく。

あの制服は以前に嫌になるほどに見せられたものだ。どうしてす
ぐに思い出せなかつたのか不思議なくらいである。

「…なんでこんな所にいるんだ」

「そうだね。どうしてこんなところにいるんだひつ」

信号が青に変わつた。立ち止まつていた人々が一斉に歩き出す。
その少女もシンゴを見つめたまま足を進め始めた。シンゴとル
ナもまた横断歩道を渡つていく。

何か奇妙な感じだつた。見覚えのない少女にこうも睨みつけられ
るのだ。相手の少女がなかなか美少女であるので不愉快なことでは
ないのだが、この状態は普通のことではない。

できるだけ目を合わせないようにシンゴは進んでいた。少女は尚
もシンゴを見つめていた。

その距離は否応なしに縮まつしていく。そして横断歩道の中心付近
を横切る時に、

「何をのんびりしてるの、この馬鹿」

と小言を一つ。その聞き覚えのある声に振り返つたシンゴであった
が、すでに少女の姿はそこになかつた。

「まだ気になる？」

電車の枕木に揺られながら座席に座つたルナが問いかけた。
手すりにもたれかかつたままで唸つてゐるシンゴは記憶の欠片が
咽に刺さつた様子で苦しんでいた。

美少女とは言えどもすれ違ひ様に暴言をかましてくるような人間
である。そうそうには忘れないだろつ。

「どつかで聞いた声なんだ。あの顔も見覚えあるしな」

「あの学校の人ならテレビにでも出てたんじゃないかな？」

ルナが指差す先へシンゴが顔を上げる。電車の中吊り広告には『魔法庁の予算増加!』と大々的な見出しが書かれた週刊誌が揺られていた。横に視線をずらしてゆくと『魔法書学生と防衛大学生の同給是非』や『怪人被害対応の災害保険』といった見出文句が目に付く。

「魔法書学生、それに怪人か…」

ルナが小さな悲鳴を上げる。見下ろすルナは「天野君、随分怖い顔をしてる」と怯えた様子だ。

「ごめんな」

そう言いながらも心の中は落ち着かない。ハツキリと誰かはわからない。それでも魔法に関係する人間が自分の周囲にいるというのはシンゴには許せない状況であった。魔法庁も魔法書学生も、そして怪人であろうと一切関係を持ちたくないからこそ普通の高校へ進んだのだ。

せつかく掴んだ平凡な日々を失うわけにはいかない。

「絶対に行くも…どわつ！」

電車が止まつた。

小林ルナの胸に倒れこんだシンゴは「す、すまん！」と顔を赤くして飛び起きたと周囲を見渡した。乗客の数はそう多くない。

自分たちと同じ学生服の少年少女達がほとんである。ゆっくりと起き上がる彼らは口々に文句を言いながら現状の把握を急いでいた。何かにぶつかって電車が急停車したのは確かにようだが車内放送の一つでもなければ現状把握はできない。加えてここは駅でもないし踏み切りでもないのだから人身事故ではなく、

「猫でも轢いたか？」

と大柄な男子学生が窓の外に首を出す。他の乗客達はおとなしく車内放送を待っていた。

携帯電話を取り出した学生達は電話やメールで事故の報告をするのに忙しい様子である。男子学生のように外を見ようともしない。
『…え、…ぎ、業務放送、こちらは…な、わああああつ…』

電話とメールが止まつたのはこんな車内放送が聞こえてきたからだ。わずか数秒の放送であつたが車内は俄かに騒がしくなつてくる。状況把握のために続々と生徒達が車外に顔を出そつと窓枠に手をかける。

：待て、やめろ！」

車内の全員がシンゴを見る。もちろん近くにいたルナは戸惑つた様子でシンゴを見上げていた。車内の誰もが落ち着かない様子であつた。例外なくシンゴも落ち着いてはいない。しかし、ゆっくりとした動作で大柄な男子生徒の体を車内に引き込んだ。

抵抗することもなく、男子生徒はぐつたりとした様子でシンゴに
よつて座席に寝かせられている。これがどういうことなのか、この
場の誰しもが把握することはできていなかつた。開いたままの携帯
電話が発信音を奏で続けている。

「…小林、窓を閉めてくれ。ゆっくりと静かに」

「」の場でシンゴの言葉を聞かない者はいなかつた。ルナは窓を持された通りにゆっくりと静かに閉める。

ギヤアアアアアアアアアアアツ！

突如として車両が揺れた。側面に車でもぶつけられたような衝撃、ルナはシンゴの胸に倒れこんだ。他の乗客達もバランスを崩して車内に倒れこんでいる。衝撃は一度だけであつたが、その異様な雰囲気は完全に乗客を恐怖させていた。

二
い
か
音はたてるな

シンゴの小さな命令に全員が頷く。震える女子学生が携帯電話の電源を切つた。誰もがシンゴを見つめている。固睡を飲み込んだシンゴがゆっくりと窓の外を見やる。普通の線路以外にはそこに何もないなかつた。わずかに安堵の表情を浮かべるシンゴはすぐさま自分の携帯電話を取り出すと「兄貴」と書かれた番号に発信を…

カタン、カタンと天井から足音が響く。

思わずルナを抱き寄せたシンゴは携帯電話を閉じてじっと天井を見やつた。他の車両からも声は聞こえない。普通ならパニックで大

騒ぎのはずだがどの車両からも声は聞こえなかつた。もしかするとこれは最悪の状態なのかもしれない。

『…もしもし、どうかしたのか由美？』

優先席の方から電話越しの声が響き渡る。大粒の涙を流しながら少女が必死に携帯電話の電源を切つた。

足音は聞こえない。外の様子も変わったようには見えない。シンゴは周囲を見渡していた。必死に手招いて優先席付近の学生達を車両真ん中に集めようとしている。しかし、少女だけが腰を抜かしてしまつた様子で動こうとしない。

「た、助けて…」

「早くこっち…！」

シンゴは言葉を失つた。少女の後ろに何かがいる。少女の真後ろのガラスに得たいの知れない何かが張り付いて車内の様子を伺つてゐる。それは黒い体表をして白濁色をした目を泳がせて少女を視認していた。ベタリとガラスに張り付いている。

「に、逃げるんだ！」

シンゴが叫んだ瞬間、少女の後ろのガラスは弾け飛んで黒い何かが少女の体を車外へと引きずり出す。

ルナを抱きかかえたまま走り出したシンゴ、それに続いたのは数名だけであつた。

他の乗客達は眼前に現れた黒い何かに恐怖して動けないでいた。隣の車両に飛び込むなり、シンゴの目には車内に倒れた乗客達の姿が入つた。あちこちで開かれた窓、そしてあの男子学生のように昏睡した様子で動く気配もない。

「いやあああああつ！」

背後の車両からは悲鳴が聞こえた。少女を捕獲した黒い何かは車内へと侵入してくる。周囲の逃げ遅れた乗客を捕まえては背後から何かを食い千切つていく。それと同時に乗客達はその場に倒れていつた。

黒い何かは走り出す。車内の乗客の全てを襲いつとシンゴの後を追

い始めたのだ。手足4本を用いて走り出した黒い何かは異様な姿である。

「に、逃げるぞ！」

シンゴに続けた乗客はさらに減った。その場に倒れこんでしまい迫り来る何かに捕食されていく。黒い何かは満足気に咆哮すると再びシンゴ達に元へと走り始めた。唾液を迸らせながら迫り来る黒い何かは逃げ遅れた者に襲い掛かつて捕食を続けた。

「あれは何なの？」

「怪人だよ、聞いたことあるだろう！」

抱きかかえられたルナが言い聞かせながらシンゴは走り続ける。しかし2人の目前には絶望的な状況が待っていた。最後部車両である。

車掌室にぶつかったシンゴはルナを背にして振り返つた。それとほぼ同時に黒い何かが最後部車両に飛び込んでくる。

二人以外には生存者はいないのだろう。真っ黒い人型の体に大きく裂けた口、背中から生える触手、怪人は白く濁った目で一人を視認するや否や唾液がこぼれる口を大きく開いて「ギャハハハハハ」と笑い声を上げる。

「…くそつ！」

シンゴは咄嗟に自分の財布を取り出す。そして紙幣の横に詰められた小さな紙を取り出すと乱雑に開いて床に置いた。そして片手で祈りを捧げるポーズをしながら唱えたのだ。

「空間魔法特例項を執行。火炎陣を申請する」

迫り来る怪人、悲鳴を上げるルナを後ろにかばいながらシンゴが大きく手を開いた。怪人の口がシンゴに迫った瞬間である。

炎が床から吹き上がり怪人を後退させた。床に倒れた怪人を確認するとシンゴはすぐさまドアの非常ロックに手を伸ばそうとする。しかし怪人が激昂した様子でシンゴを睨み付けていた。おぞましい口元からは怨念を唱える音が響いてくる。

「ギィイイイイイイ！」

「くそ、ダメなのかよ！」

再び迫り来る怪人、ドアを諦めたシンゴは咄嗟にルナを抱きしめて怪人に背を向ける。

「この馬鹿、かつこつけるな！」

轟音とともに炎の壁が怪人とシンゴ達を隔てる。

眼前の光景に怪人は思わず飛び退く。シンゴは聞き覚えのある声に振り返った。

自分の背後にはあの交差点の少女が腕組みして「王立ち姿をそこ見せていたのだ。

「お、お前は……」

「新堂ヒロエ！」

名乗った少女は横目でシンゴとルナを見やつた。そして不機嫌そうにフンと鼻を鳴らすと左手を前に掲げて円を描く。するとその中心点に光が集まって図鑑ほどもある分厚い本が出現したのだ。ルナはその光景に言葉を失っているがシンゴは苦々しそうにしている。その本を開いたヒロエは文面を右手でなぞるような素振りを見せた。

「空間魔法特例項を執行。防衛陣による民間人保護を申請する」

その声とともに、大きく振った右腕をシンゴ達へと向ける。まるで燐粉を撒かれたかのように一人の周囲を輝く粒子が覆つた。

「対怪人には有効な防衛陣よ。魂を奪われくなれば勝手に動かないで」

ヒロエは本のページを変えた。そして、文面をまたもなぞり始める。

するとヒロエの髪が真っ赤に染まつた。まるで燃え上がった炭のように黒い髪から真っ赤な炎の光が見える。その光りは次第に強くなり、髪は燃え上るように空へと浮かぶ。そして、田までもが炎を灯したように真っ赤に燃えがっていた。

「空間魔法を執行する。新堂ヒロエの名において空間の任意変化を

申請」

その分厚い本を読み上げるよつにヒロエは指で紙面をなぞつていく。

「続いて怪人撃退の執行を申請。ヴルカヌスの名において剣の使用を申請する！」

分厚い本は閉じられた。すると本は瞬く間に少女の手の中で燃え広がり、まさにヒロエの体を包み込むほどにまで広がる。

「申請の受諾を確認。炎の剣エランズ・ルパス召喚」

その一言に炎は横に大きく広がつた。そして徐々に形を成していく炎は剣となつてヒロエの腕に出現したのだ。

咆哮した怪人が襲いかかる。その腕を剣で受け止めるや否やヒロエは怪人の横腹を蹴り飛ばした。凄まじい炸裂音とともに怪人の体はドア諸共に車外へと弾き飛ばされる。

線路に倒れこんだ怪人に對してオリンピック選手ばかりに空を舞うヒロエ、迫り来る怪人の触手は空を駆けるように回避した。

もはや怪人の目にはヒロエしか映つていない。空を自由に駆け回るヒロエを前にして怪人が遊ばれているようだつた。ルナを抱きしめたままのシンゴも、ルナも2人の戦いを凝視して逃げることも忘れていた。

隙をついて怪人の懷に飛び込んだヒロエはそのまま剣を大きく振るつて触手と腕を断ち切る。黒い体液を噴出す怪人、ヒロエはそれでも間髪入れずにその燃え盛る切つ先を深々と怪人の胸へと打ち込んだ。

「淨化！」

剣から一層強い炎が吹き出す。

真つ赤な炎は怪人の体躯をそつて全身に駆け巡り全てを焼き尽くすかのことく激しく燃え上がつた。怪人が断末魔の声を上げる中でヒロエの髪も瞳も徐々に落ち着を取り戻して黒色に戻つていく。

「…簡易魔法紙の火炎陣で怪人を倒せるとでも思つたの？」

ヒロエが振り返る。黒い瞳がじつとシンゴを見つめていた。あの

交差点の時のような攻撃的な視線である。

「お前、いや、ヒロヒ、どうして……」

「シンゴー、あんたはどこへ行つても花柳崎の男なのよ。覚悟を決めておきなさい……！」

炎が一段と強まって怪人が膨れ上がりしていく。その体躯からは煙だけではなく半透明な何かが放出されていた。

怪人の体が3倍にも膨らんだ瞬間、その周囲を閃光と爆発が周囲を包み込む。

「ヒロヒ！！」

シンゴの視力が正常な感覚を取り戻した頃、そこにヒロヒの姿はなかった。

怪人の燃え尽きた後だけがこの事件を夢ではなく、そして始まりだとシンゴの目に刻み付けていた。

第1話 炎の少女（後書き）

書いている間はいいですけど
ネット上に上がると恥ずかしいもんですねえ
感想とかどんどん送つてください！
よろしくお願ひします^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4451d/>

BookMan

2011年1月18日15時57分発行